夜の学校
ＮＯＩＳＥ’９２
作・演出／如月小春

【ＳＴＡＦＦ】

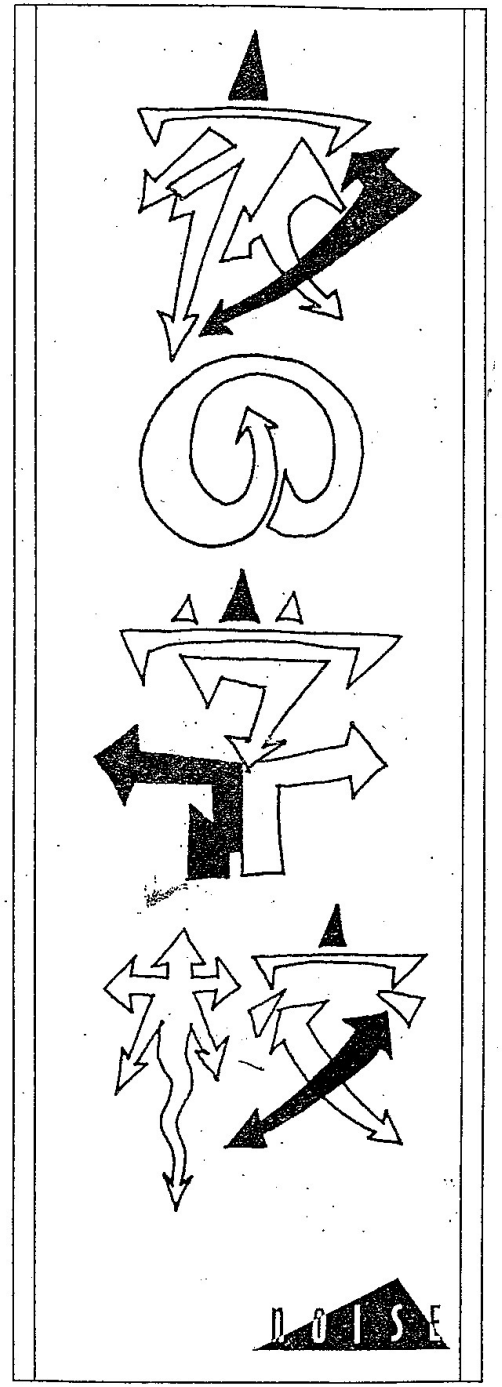
照　　明／黒尾芳昭（キッズ）
作　　曲／近藤達郎
音　　響／青木拓平（ステージオフィス）
美　　術／ロスト・パラダイス
装置製作／アルチザン
衣　　装／田中美緒
舞台監督／堀内真人、野口　毅
舞監助手／埋橋真理
制作協力／竹尾直子、片桐久文
制作助手／森　直子
制　　作／椹屋一之

【ＣＡＳＴ】

女教師／瀧川真澄
母／平川和宏
少年／稲田恵司
メイド／小柳史奈子
委員会の男／甲斐智暁
マリコ／吉村朋子
地上にでてきたモグラ／花畑ソラト（能楽見習い）
天使Ａ／堀内　仁
天使Ｂ／太田美央

【ＳＣＨＥＤＵＬＥ】

東　京・下北沢ザ・スズナリ
　５月２９日（金）～６月７日（日）
名古屋・東別院ＮＢＮホール
　６月１１日（木）
　主催／名古屋テレビ放送
大　阪・近鉄アート館
　６月１３日（土）・１４日（日）
盛　岡・盛岡劇場　６月２０日（土）
　主催／岩手放送・盛岡劇場
函　館・金森ホール
　６月２２日（月）・２３日（火）
　主催／北海道新聞函館支社・
　（財）函館市文化スポーツ振興財団
　金森ホール
横　浜・相鉄本多劇場
　７月３日（金）～５日（日）



それは、こんな夢だった。

夜更けにどうにも寝つかれなくて、裸足で外に飛び出し、曲がりくねった道をどこまでも走ってゆくと、学校の前に出る。鉄柵を乗り越えて見渡すと、校庭はまるで水を抜いたプールの底のように真っ青で、ひどく広いのだった。

その広い校庭を、私と同じようにして塀を乗り越えた子供たちが、正面に立つ黒々とした校舎に向かって幾人も走ってゆく。見上げると、月。三日月。黄色。真っ黄色。子供たちの影は青い校庭に細長く伸びて、小刻みに左右に揺れながら走っていった。——そして私も。

色付きの夢はしばしば見る。けれど、色が主役の夢は数えるほどだ。あんまりあの青い校庭が印象的だったので、今でも時々、夜更けに学校の近くを通ると、思わず中をのぞいてしまう。

私はその夢を、〈夜の学校の夢〉と名付けた。そしていつか舞台にして、もう一度、あの風景をこの目で見たいと思っていた。夢を見た日から二十年がたち、やっとその思いがかなう。

高校生の頃の私は、ただの反抗的なガキだった。学校もイヤ、家庭もイヤで、しょっちゅう家を飛び出してはほっつき歩いていた。けれどどこにも行き場がない。仕方なく、近所の小学校の鍵をしめわすれた体育用具室かなんかで夜明かしするのである。あちこちに頭をぶつけながら過ごしたあの頃、私にとっての学校は昼のそれではなく、夜の、あの人気の絶えた校庭だった。用具室の扉の細い隙間から見える世界には、男や女やゼンガクレンや世界平和や風に揺れる木々が立ち、いろんな授業をしてくれた。

たぶんそのせいだろう。わたしはそのまま昼の学校ではほとんど学ぶことなく、夜の学校によく似た、演劇という教室に通いつめて今に到っている。

この芝居で私は何を描きたかったのだろう。正直なところ、自分でもよくわからない。ただ、出会って、愛して、別れていったいろんなもののことを、もう一度、この手にとって確かめてみたい、私にとっての世界を、堆積した記憶を掘り起こしながら、痛みに充ち、かつ輝きにあふれた日々についての思いを形にしたいとだけ考えていた。

物語の骨格は、〈旅〉である。見知らぬ街を訪れ、また去ってゆく〈旅〉と、自分の過去へと戻る〈旅〉が重なりあい、記憶の断片がさまざまな、歪みひずんだ人格となって旅の主体である女教師におそいかかる。

男の幼児性、女のひとりよがり、子供の暴力、天使の無力……。夜の学校で出会い学んだ事柄を、悪夢のようでいながら実は素敵な愛の夢でもあった、私と、私の演劇の日々を、ＮＯＩＳＥの〈同級生〉たちと共に、ようやく今、舞台に出来る。

如月　小春